

気になる言葉⑨ 万国博覧会

佐々木 隆

では、現在の万国博覧会はどのような定義のもとで開催されているのであろうか。国際博覧会条約の第一条の定義を見てみたい。

第一条 定義

一、博覧会とは、名称のいかんを問わず、公衆の教育を主たる目的とする催しであつて、文明の必要とするものに応ずるために人類が利用することのできる手段又は人類の活動の一若しくは二以上の部門において達成された進歩若しくはそれらの部門における将来の展望を示すものをいう。

文化交流、文化外交という観点から見れば万国博覧会は重要なイベントである。

万国博覧会は、十八世紀末にフランスで行なわれた国家が推進する国内産業品の展示会を起源

現在、上海万博が開催されているが、よく一九七〇年に開催された大阪万博と比較されることがある。ここでは、万博の持っている意味そのものを取上げておきたい。

一般的な「万国博覧会」の定義を『広辞苑』（二〇〇八）から紹介してみたい。

【万国博覧会】(International Exhibition)世界

各国が参加する博覧会。最初は一八五一年ロンドンで開催。のち一九二八年国際博覧会条約がパリで締結され、日本は六五年加盟。七〇年に大阪で、二〇〇五年に愛知県で開催。

略称、万博。(一)

とする。当初は国内市場の活性化を目的とした製品の展示会であったが、万国博覧会となることで国家間の製品競争となり、やがては様々なスペクタクルによって商品を幻想化していく資本主義の文化装置へとなった。

万国博覧会は、これまでの研究から大きく三つの側面に分けることができる。第一に国家間の技術競争、第二に消費と娯楽、第三に帝国の支配を正当化する文化装置、ディスプレイである。この三つの要素はそれぞれにからみあいながら万国博覧会を形成していた。(一)

ここには「国益」「パブリック・ディプロマシー」といった内容が明瞭に示されている。

「万国博覧会と日本」については、アジア歴史資料センターのホームページに「万国博覧会に見る日本」と題して、以下のように述べられている。

万国博覧会に最初に日本が登場したのは、一八六七年（慶応三年）のパリ万博です。しかし、この時は、幕府、薩摩藩、佐賀藩がそれぞれ独自に出品を行っただけで、まだ「日本」という国を紹介するとは言えないかたちでした。この後明治維新が進み、初めて明治政府、つまり日本の政府として正式に万国博覧会に参加したのが、この次の一八七三年（明治六年）のウィーン万博でした。(二)

なお、過去の万国博覧会の開催地については外務省のホームページより閲覧することができます。今回の万博でいまひとつ盛り上がりには掛けるのは、いわゆる目玉の展示がないことだ。本来ならば、エコーカーなどが挙って展示されるべきところだが、どうもその様子もない。開催されてもお完成していない

パビリオンがあるくらいだ。今回むしろ一番気になることは、国際博覧会条約第一条にある「公衆の教育」といったところだろうか。開催国の中華人民の共和国のイベント開催手腕が問われたことは言うまでもない。チケット奪い合いやコンサートの中止は一般民衆というよりは中国全土から上海へ来た人民をどう誘導していくのかといった、主催側の準備不足とイベントに対する認識不足が原因であろう。また、よく言われることだが、列を作り、並ぶ習慣を小さいときから学校教育で知らない間に身に付けてきた国民から見ると、あまりにも「公衆教育」の欠如を感じる。今や自動車産業でも世界一となった中国は、今後どのような道をたどるのだろうか。

〇〇八年一月、二四二四頁。

(二) 伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』(吉川弘文館、二〇〇八年六月)、一頁。

(三) 「五 万国博覧会に見る日本」明治・昭和の『COOL JAPAN』

(<http://www.jacar.go.jp/special/p05/index.html>)
二〇一〇年一月四日)

注

(一) 新村出編『広辞苑』(第六版)(岩波書店、二